

## 石見銀山遺跡と巖島神社.

### 出雲大社の旅

11月18日～20日にクラブツーリズム主催の、夫婦限定世界遺産石見銀山遺跡と尾道の千光寺、宮島の巖島神社、出雲大社正式参拝、松江散策と足立美術館の見学ツアーに参加した。

#### 岡山駅からバスで尾道へ

名古屋駅 7.32” のひかり 393号で岡山へ向かう。このツアーは夫婦だけの寛ぎの休日売りとしており、往復の新幹線はグリーン車指定となっている。10号車3番ABの席に落ち着くといいよ旅の始まりである。

朝は東浦駅 6.00” の一番列車に乗るため 4.40 に起きて、いつもどおりの食事はしてきたが妻が作ってくれたおにぎりを食べると、これがうまかった。そのあと車内販売のコーヒーを飲んでやっと落ち着くことが出来た。

9.33” 岡山到着、バスに乗り換え 10.00” に尾道に向けて出発した。期待した?バスガイドさんは、美人とはちょっと言いにくいおばちゃんだった。でもこのガイドさんに後々感謝することになる。山陽自動車道に入る前に岡山の説明をいくつかしてくれた。元は陸軍の施設だった岡山総合公園の横を通り、昭和天皇の娘池田厚子さんの池田動物園の説明、鬼が吉備津神社に祭られている桃太郎伝説、京都の伏見稲荷、愛知の豊川稲荷とあわせ三大稲荷と呼ばれる高松稲荷。

以外だったのは高梁川上流には、北海道の釧路とばかり思っていた鶴の丹頂を育てている保護センターがあるという。尾道の千光寺へは福山西 IC を出るほうが早く、下駄の絵が描かれたインターを出る。福山は下駄の生産とお琴の生産が知られている所である。

## 高台から見る瀬戸内のすばらしい景色

尾道の高台にある千光寺公園に 11.30” 到着した。とても狭い道をくねくねと回りながら登ってきたが、シーズン中だと車が多くとてもスムーズには走れない。特に桜のシーズンは一番にぎわうという。

駐車場から少し登った所で自由行動となる。まずは千光寺の本堂まで降りることにして急な坂道を下り始めると、視界が開けて瀬戸内の島並みが眼前に迫ってくる。すばらしい眺めである、でも風がちょっと冷たさを感じる。お天気は良いので日当たりにおれば気持ちが良いのだが。途中には頼山陽の像や何故か関取衆の手形があった。数分で千光寺に着いた、崖にへばりつく形でお寺が建っており、瀬戸内を眺める絶好の展望台と言ったところだ。



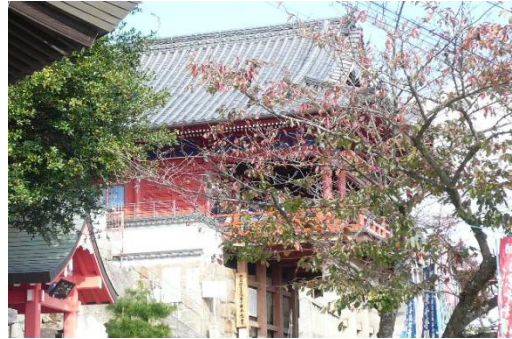
千光寺から見た尾道の街と尾道大橋

目の前には大和の模型が展示されていた造船所が、左手には尾道大橋が因島と本州を結んでいるのが見える。まるで絵を見ているような景色である。桜が咲いている時は大勢の人が来るのもうなずける。ここしまなみ海道は、尾道から愛媛県の今治までの六つの島を 10 の橋で結んだ 59.4km の道である。本州四国連絡道路三つの中で、唯一自転車や歩いて渡れる道路である。できれば自転車で四国までのんびりと渡りたいものだ。瀬戸内の景色は岡山の鷲羽山で眺めた以来だが、何度見ても素晴らしい眺めにうっとりしてしまう。パンフレットには志賀直哉の旧居があると記されていたが、見学はできな

った。瀬戸内の景色を堪能し千光寺にお参りをして、お守りを買って引き上げ、近くの千光寺山荘で昼食となった。



ヤマトの模型が置かれていた造船所



千光寺の本殿

## 巖島神社はなぜ海の中にあるのか

13.00” に千光寺を出発して山陽自動車道を走り、宮島に 14.15” には着いたのだがここからがいけない。競艇の開催日とも重なり、日曜日の人出は多くフェリー乗り場にたどり着くのに 40 分もかかってしまった。

できたら 14.20” の船と言っていたのが、15.05” の船で宮島に渡った。フェリー乗り場も巖島神社への道も人々でおおにぎわいだった。ここではとても元気の良いお姉さんが、てきぱきと案内し説明してくれた。でもバスが遅れた分だけ時間がなくなり、見学はゆっくりすることはできずかなりのハイペースであった。したがって、本殿でお参りした以外はカメラを構えながら説明を聞いていたほどだ。この巖島神社は平成 8 年 12 月に、社殿を中心とする神社と前面の海、および背後の弥島原始林を含めて世界文化遺産として登録された。

朱塗りの大鳥居は杭が打ち込んであるのではなく、置いてあるだけという。この大鳥居と本殿の距離は 108 間、今の鳥居は 8 代目にあたる。巖島神社が現在の規模になったのは、仁安 3 年(1168)に平清盛が造営した。そして、地盤のしっかりした所ではなく海水の差し引きする所に建てたのは何故か？

宮島は昔から神の島として崇められていたので、社殿を陸地に建てなかつたと言われているのだ。それにしても朱塗りの建物は、青い海に浮かぶようでとてもすばらしいコントラストを見せている。

不思議に思ったのは厳島神社背後の高台には、これまた朱色が鮮やかな五重塔が建っている。お寺さんなら分かるが、と思ったら少し離れた所にお寺があるにはあった。われわれ日本人はお寺も神社も同じように考えているのか、さほど違和感を覚えないうらしく誰も何も聞かなかつた。

16.30”の船に乗り、案内してくれたガイドのお姉さんのお店に寄ってお土産を買う。これが観光地のパターンになっているようだ。そして17.00”には広島市元宇品町のグランドプリンスホテルへ向かつた。



宮島のシンボル大鳥居と本殿

## 満員のグランドプリンスホテル

部屋は15階1501号室、とても見晴らしがよい。添乗員の服部さんの説明ではホテルは満室のため、添乗員、バスドライバー、ガイドさんは別のホテルに泊まるという。なるほどと思わせたのは、エレベーターに乗ると学生が多いし、いろいろなバッジをつけた他のツアー客にもたくさん出会う。これを見ると団体客用のホテルかと思われるくらいである。

この時季に宮島や広島は観光客が多いのか不思議なくらいだが結構なことだ。夕食は和食、洋食、中華から選択できるようになっており、私たちは中華を頼んでおいた。和食はオーダーが多くて、待ち時間があるかもしれないと

言う説明だったが、中華のレストランは客も少なくとても静かな雰囲気がよかった。久しぶりに豪華なレストランで夜景を見ながら、妻と差し向かいでの食事は日頃の生活を忘れさせてくれるものがある。少しだけいただいたビールもことのほかおいしく、忘れられない思い出となった。



ホテル 15 階から見た広島夜景と朝の瀬戸内海

## 二日目

今日の予定は石見銀山の見学と、出雲大社の正式参拝である。バスはホテルを 8.00” に出発した。

### 高速道を乗り継ぎ石見銀山へ

広島市は現在 120 万人の大都市に発展しているが、昭和 20 年 8 月 6 日に原子爆弾が投下されたことで多くの犠牲者がでたこと、そして原爆病は今も多くの人々を苦しめていることを忘れてはならない。

その広島は毛利家が治めていた街で、関が原の戦いの後は福島正則が一代治めたが、その後は浅野家 42 万石の城下町として栄えた所だ。アジア大会も開催されてこの時に会場までのアクセスとしてモノレールが造られた。しかし、工事中に橋脚が落下して、車がペチャンコになり 23 人ものが亡くなっている。市内を抜けて広島自動車道を走り、広島北 JCT から中国自動車道に入ってまもなくの安佐 SA で休憩した。



昭和 58 年に開通した中国自動車道を少し走ると、千代田 JCT から浜田自動車道へと入って行く。日本海側の浜田は毛利元就の地で、神楽の衣装を作っていることで知られる街である。浜田自動車道を少し走ると次の大朝 IC で高速を降りて一般道を走った。ここで感じたのは、一般道を走るとその土地のことが良く見えるということだ。のどかな田園地帯を走ると農家のたたずまいや庭の木々までが新鮮に映る。高速道は移動には便利だがやはり味気ない旅になる。ガイドさんの説明でなるほどと思ったのは、山陽側の家は赤い屋根瓦ばかりで緑の多い田舎では、周りの景色に映えてとても美しい。



朝霧に包まれる広島県千代田付近



大朝の民家と銀杏

## 石見銀山の歴史

世界遺産に指定されて一躍脚光を浴びることになった石見銀山は、龍源寺間歩のみが一般に開放されている。間歩というのは坑道のことで、石見には永久. 大久保. 新切. 新横相. 龍源寺間歩の五つの坑道があった。

これらはいずれも代官所の直営で「五か山」と呼ばれていました。初代石見国奉行は大久保長安で、彼の墓は江戸時代の銀の精錬遺跡である下河原吹屋跡の近くに残っています。このあと 59 人の代官が務めますが、19 代の井戸平左衛門は庶民に米を分け与えたり、食料として「さつまいも」の栽培を広めたといひます。さつまいもは青木昆陽とっていましたが、ガイドさんはそうではありませんよと力を込めた。

江戸時代には 300 の間歩があり、龍源寺間歩の坑道は長さ 600m に及んでおり、大久保間歩につぐ大坑道です。このうち実際に間歩の通り抜けが出来るのは 157m の部分だけです。山を閉じたのは昭和 18 年と言われ、実に 228 年間も間歩の開発が行われました。ピークは慶長年間で年間 38 トンの良質の銀鉱石が採掘され、世界の銀の 2/3 を産出したといわれています。そして、これらの銀は温泉で知られる温泉津の湊から運ばれていきました。

## 大森の街並みを散策

10.45” に石見銀山の観光バス乗降所に到着し、早速大森の街並を見学して歩いた。銀山川を渡ると白壁づくりの大森代官所跡の資料館がある、周りの山の紅葉に白壁が映えて美しい。そこから大森の街並が続いている、山あいの一本の道の両側に格子窓の家が並び白壁の家が点在する。その中でひととき目立つのが重要文化財の熊谷家で、石見銀山の経営に携わり裁判所の御用達も勤めたという。さらに当主は代々町役人も勤めた名士。その先には街並に合わせて造られた郵便局があり、店先で銀の貨幣を模したはがきを売っていた。「自宅宛に出すといい記念になりますよ」と売り込みをしていたが 1,200 円はちと高いのでは。



大森の街並を散策

蛇行した銀山川を二回渡った所に「太田市大森銀山伝統的建造物保存地区」の碑があり、その背後にとっても立派な洋風の建物がある。何かなと思ったら

旧大森区裁判所の看板がかかっていた。その川向には妙連寺がある、パンフレットにはこの地区に六つのお寺が載っている。危険な鉱山の仕事だったためにお寺が多いのだろうか。

短時間の散策ではあったが、観光客も予想ほど多くはなく落ち着いた大森の街並を歩くことができた。

## ちょっとつまらない龍源寺間歩の通り抜け

早めの昼食を済ませてバス停に並び、11.50”の龍源寺間歩行きマイクロバスに乗った。定員になると次の便に乗らなくてはならず気をもんだが、後ろにも団体客がいて一部の人には順番を入れ替わってもらい、お互いにグループがまとまって乗車することが出来た。さすがベテランの添乗員さんだけのことはある。バスは8分ほどで龍源寺間歩に到着するが、途中に大森小学校があり生徒数が去年は12人で24の瞳だった。今年は一人増えて生徒は13人いるという。ほぼ中間にもう一箇所のバスの乗降所がある銀山公園前を過ぎて、龍源寺間歩までの間には銀山にかかわるいくつかの遺跡がある。江戸時代の銀精錬所跡の下河原吹屋跡明治時代の銀精錬所跡で、壮大な石積みが残る清水谷精錬所跡、銀山役人として採掘技術に腕を振るった吉岡出雲の墓、金銀山の見立てで功績を挙げた宗岡佐渡の墓など。



龍源寺間歩の内部と説明図



12.00に龍源寺間歩に到着して坑道に入ると、人は楽に立って歩くことができる高さだった。パンフレットには坑道の高さ1.6m～2.1m位で、幅は0.9m～1.5mとある。ノミで掘った跡が当時のまま残っている。しかし、足元は整備されているので歩きやすかった。それに、所々灯りがあるとはいえ暗い穴倉の中であり、ゆっくり見学する気分にはなれない場所で、自然に急ぎ足になっている。

こうした鉦山をどのようにして見つけるのか、当時は①雨上がりの朝に山に登り南を見て煙の具合で判断した。②植物の分布状況で判断したとバスガイドさんは説明してくれたが.....。龍源寺間歩を12.35”のバスで銀山公園まで戻り、急ぎ羅漢寺へ向かった。五百羅漢を見て写真を撮りたいと考えていたのだ。前まで来ると拝観料500円とある、けっこう高いと思い寺の前に回ると道路から五百羅漢は見えるのだ。シンボルである石橋をメインに数枚の写真を撮った。川沿いの大きな銀杏の木が黄色に染まり、あたりの紅葉もなかなか美しい。羅漢さんは拝めなかったが羅漢寺は見るだけで帰った。



羅漢寺のシンボル石橋と五百羅漢

神様が集まる日に 出雲大社に正式参拝

13. 20” 銀山を後にして出雲大社に向かい、14. 30” には出雲大社に到着した。今月の11月は世間では神無月と言うが、ここ出雲では神在月(かみありづき)というのだ。それもそうで、全国の神様はこの出雲に集まるわけで、神様はいらっしゃるのだ。その神様がお集まりになるのが今年は19日の今日である。そのため今日は神迎祭、20日は神在祭が行われるなど、神様がお帰りになる26日まで会議が行われるのだ。

何の会議かと言えば、誰と誰、何と何の「縁」を結ぶための会議である。とてもタイミングのよいときにお参りが出来たもので、うれしい限りだ。出雲大社の祭神は大国主大神、つまり大黒様である。現地のガイドさんが案内してくれたが、彼女もお土産屋さんの人なのだ。でも、しっかり勉強していて資格を持っている人たちである。以外だったのは最初に説明してくれた参拝のしかたである、出雲大社では二礼四拍手一礼なのだ。何故四拍手かと言うと、語呂合わせの「しあわせ」にちなんでのことらしい。

ここ出雲は神話の国で、出雲大社に神様が集まり「縁」を結ぶために会議を開くなど、いまどきの若者なら笑い飛ばすようなことが、厳かな儀式として続いている謎とロマンに満ちた国である。同じ日本の中でも別の世界があるような感じである。お祓いを受けてから浄掛(きよかけ)を首から掛けて、本殿に入り二礼四拍手一礼の作法で、息子に良い縁がありますようにお参りをした。



出雲大社本殿

ここ出雲大社では60年に一度遷宮が行われる、しかし、伊勢神宮とは違ってここは国宝の本殿と21の重要文化財の建物の屋根を葺き替える、それもヒノキの皮60万枚を使って行われる。次回は平成20年に本殿修復のため、大国主大神に移ってもらう仮殿遷座祭が行われ、本殿の修復が完成する平成25年5月に新しい本殿に戻っていただくのだという。そして、出雲大社境内から発見された巨大な柱が展示されているが、それから想像される平安時代の神殿は、高床式で今のビルなら7階、8階に相当するというから驚きである。ほんとにそんな神殿があったのだろうか?? とても考えられないことだ。

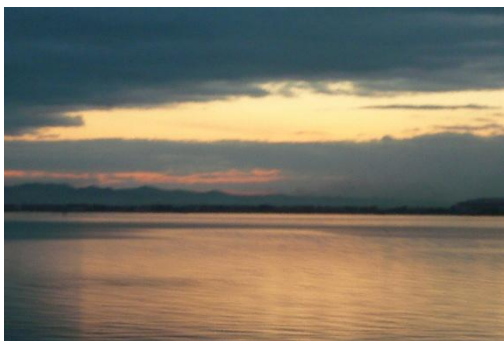
16.30” 出雲大社を出発して宍道湖温泉「ホテル一畑」に向かう、夕陽の沈む宍道湖を眺めるのには少し遅れてしまった。でも雰囲気だけはバスの中から味わうことが出来る時間に到着し、8階の808号室に落ち着いた。

### 三日目

今日はゆっくり9.00”の出発である、松江の散策と足立美術館の見学をする。そのあとはお菓子の城に寄って岡山駅から新幹線で帰る。

### 小雨に煙る 塩見縄手を歩く

朝8階の部屋から外を見ると、冬の日本海側を象徴するどんよりした空模様で小雨が降っていた。とうとう降られたかと、予期していたとはいえちょっとばかり残念な気持ちだった。辺りを見回してみると宍道湖にはすでにシジミ採りの小舟が何艘もでていた。



前日バスから見た夕暮れの宍道湖



早朝のシジミ採り舟

何もこんなに朝早く冷たい時に採らなくてもよさそうに思うが、その日の出荷のためには早くから準備しなくてはいけないのだろう。何事も商売をするということは大変である、そんなシジミ採りの舟を横目に見ながら朝湯に行った。昨夜は到着してすぐと就寝前の2回温泉に入ったので計3回の入浴である。ゆっくりお湯に浸かり腰をしっかり温めてきた。

9.00”にホテルを出て数分で堀川巡りの船着場に到着する、オプションの遊覧船に乗る人が20人、街並散策を希望する人が20人と半分半分に分かれた。松江の街は戦災の被害を受けなかったという、そんな街の中で小泉八雲旧家と武家屋敷のある塩見縄手を歩くことにした。ギリシャから来たラフカディオ・ハーンが、小泉節子と結婚して松江で生活し、小泉八雲としていく



ラフカディオ・ハーン記念館と奥が旧家

つかの作品を残した。そのことは知っているが不勉強で作品を読んだことはないで、幽霊を扱ったものが多いことくらいしか知らない。

そのハーンの記念館が交差点の角に、白い漆喰と黒い板塀で出来た塀に囲まれたたずんでいる。隣の八雲の旧家と並んで建っており、小雨の中にとっても趣のある景色だ。さらにその先には同じような塀が続き、400mにわたって武家屋敷が並ぶとても風情のある落ち着いた通りとなっている。

その道向かいには大きな松の木、それも真っ直ぐ上に延びずに一度地面についてから上に伸びた木など、たくさんの大きな松の木が松江城のお濠に沿って続くすばらしい通りになっている。ここは塩見縄手と呼ばれる通りで、松



江市伝統美観指定地区になっている。塩見縄手というのは、城郭の構えを決める時にまず縄張りをして墨濠などの形態を区画しました。城下町では縄のように一筋に延びた道路のことを縄手と言います。

塩見は町奉行塩見小兵衛からとったものです、というのも塩見家が異例の栄進をした家柄だったので、その栄進を記念して塩見縄手の名が生まれたという。そんな風情ある松並木の続く塩見縄手を、観光用のレトロバスが走り抜けていった。



塩見縄手の武家屋敷と松並木

## 松平直政 18万6,000石の松江城

このあと約1km歩いて松江城を見学した、このお城は慶長12年(1607)堀尾吉晴が城下町松江の街造りを始め、5年の歳月をかけて慶長16年(1611)に松江城と城下町が完成したものです。というのも、堀尾吉晴は関が原の戦いで功を認められ、出雲・讃岐両国を与えられ広瀬の富田城へ入場したのです。しかし、富田城の地形は高い山に囲まれて近代戦には不利なことから亀田山に城を移すことにした、それが松江城です。

稲荷橋を渡り城内へ入ると、少し登りの坂道が続き石垣が現われた。しかし、天守閣は一切見えずかなり広い城郭を思わせる。ほどなくして松江護国神社があり、さらに進むと高い立派な石垣が現われて大手門に着いた。いつも思うのだが、石垣をこのように美しく造り上げる技術は素晴らしいの一言に尽きる。いったいどのように測量したのだろう、昔の人の知恵には頭が下がる。

大きな木々の中に色づいた紅葉が美しい、その周りで枯れ葉を集めて掃除をしている人が数人いた。どこかの小父さんが「毎日掃除をするのかね」と聞いていたが、交代でやっていますよとのことだった。

そしてたどり着いた天守閣はどっしりとした黒いたたずまいで、辺りを威圧するような威厳が感じられた。この天守閣は最上階が四方を見渡せる望楼式で、石垣は「ごぼう積み」と呼ばれる積み方がしてある。城内には兵糧貯蔵用の穴倉、井戸、石落としなどを備え実戦本位に造られているのが特徴だという。

松江市では築城 400 年になる 2011 年に向けて、松平家 18 万 6,000 石の松江を PR するために、さまざまなイベントや行事を展開するそうだ。



黒い姿が精悍な松江城

## 「どじょうすくい」で知られる安来市へ

宍道湖湖畔の松江の街を出て山陰自動車道を走る、ほどなくして中海が見える。この中海は境水道で日本海の美保湾につながっているが、中海は細い川で宍道湖とつながっている。したがって、宍道湖は中海を通じて海水も入る汽水湖である。以前、米の増産のために中海を干拓する計画が持ち上がった

たが、中海を埋め立てると宍道湖は海水が入らなくなり、シジミが死滅してしまうのだ。そのため中海の干拓反対運動が起きて、シジミが干拓を阻止した経緯がある。

まもなく広瀬の町を通る、ここは松江城の前身富田城があった所で出雲の国を治めていた尼子氏の居城であった。所々に「尼子の里広瀬」という看板が見られた。そして、次に現われたのは「どじょうすくい」の看板で安来市に入る。その古川町にある足立美術館に 11.00” に到着した、見学の前に早めの昼食は薬膳料理であった。紫穀米のごはん. ヤーコンのうどん. クコの実と秋刀魚の煮付け. 茶碗蒸し. 切干大根. まいたけの吸い物というメニューだった。秋刀魚の煮付けは初めてだがなかなかいける味だった。

## 庭がメインの足立美術館

一度訪れてみたいと思っていた足立美術館に、やっと来ることが出来た。この美術館は地元出身の実業家足立全康が昭和 45 年秋にオープンさせた、名園と名画を鑑賞できる所として知られる。

館内に入ると最初に目に入るのは絵画ではなく、日本庭園である。全面ガラスの向こうには日本庭園の枯山水庭、白砂青松庭、苔庭が眼前に広がり閑雅な風情と紹介されている。ほんとに美しい庭に目を奪われること間違いなく、展示されている作品がかすんでしまうのではないかと懸念されるほどだ。横山大観をはじめ河合玉堂、伊藤深水、橋本関雪、榊原紫峰、林義雄など近代日本画壇の巨匠たちの作品 1300 点を収蔵する大コレクションなのだが。ほんとにその通りで絵画に見識のない私は、どの作品よりも庭の美しさに強く引かれたのだ。記憶に残った作品は、横山大観の紅葉. 河合玉堂の鵜飼. 伊藤深水の娘. 林義雄の夕焼け小焼けだ。その中で私は林義雄の、童画というのか子供たちと夕陽を描いた作品が好きだ。あとで売店に寄ったら、林義雄の作品はいずれも童画の心温まる作品が何点かあった。その中で、森で踊る小人たちを描いた「四季の森」の色紙をお土産に買い求めた。



見る者を魅了せずにはおかない美しい庭



角度を変えて見た庭

このあと少し疲れたので庭の見える喫茶室へ立ち寄った、庭の真横の席に腰を下ろすと視線の先には美しい庭が大パノラマのように広がっている。こんな景色を眺めながら飲むコーヒーは、お茶とは違うもののおいしかった。竹墨のスプーンが付いて出されたが、値段は驚くことに735円もした。バスガイドさんに値段は高いと聞いていたがこれほどとは思わなかった。そんなわけで一番印象に残ったのは、展示されている作品ではなく庭の美しさとコーヒーの値段の高かったことである。

13.45” 足立美術館を出発し、途中で米子のお城を模して造ったというお菓子の城に立ち寄り、16.50” 岡山駅に到着。そして17.33” のひかり384号の8号車1番C.D席で名古屋駅に19.57” 帰り、今回の旅も終わった。